

# 自分が「やり残した」 ことは何?

習慣  
8

⑤ 震災機に、あきらめかけていた  
ソフトコンタクトレンズの付け外し器具を開発

指を使わず簡単にソフトコンタクトレンズの付け外しができる「meruru」を開発した齊藤和子さん。以前は眼科でコンタクトレンズの付け外しの指導をしていたが、怖くてあきらめてしまう人がいたという。「だったら自分で補助器具を作れば?と夫に言われたんです。シリコンやスポンジを切り貼りしてイメージを固めたが、「プロに試作してもらおう段階になるとイメージどおりに仕上がらない。お金がかかるばかりでいったん投げ出してしまいました」。しかし東日本大震災後、福島

から避難してきた女性が言った。「被災地では水が貴重で指が洗えない、コンタクトなんて使えなかった」。これに奮起した齊藤さんは商品開発を再開。完成した「meruru」は月2000個を売るヒット商品に成長している。「あの時私は怒られてる気がしたんです。私が作らなくちゃだめだ、私にはやり残しがあるんだと思いました」。

メディレック(株)／横浜市中区  
齊藤和子さん(60歳)

# 「これだけあればいい」 と思えるものを探す

習慣  
10

⑥ 仕事人間が震災機に反省、「生きていくために必要な本」だけ売るブックサロンを開業

会社員時代は「女は男の倍仕事しないと認めてもらえない」と思い込んでいた元木忍さん。だが東日本大震災が「素の自分」を取り戻す契機に。「地震の残酷さを見て、私が本当にすべきことはなんだろう」と。答えは「小さくていいから思いを届けられる書店」。「ヨロッパの小さな書店で、おばあちゃんが日なたでゆったり本を読んでいるのを見た。必要な数の本があればいい、これだけあればいいと思える本と暮らしたいと思いました」。必要なものをシンプルに表現すると天職の形になる。

(株)brisa libreria／東京都港区  
元木忍さん(47歳)



# Method.2 ゼロリセットで 原点に立ち戻る

常識や既存概念に囚われず、「素の自分」の声に耳をかたむける。大きな事件・事故を機に生き方を転換する。

習慣  
9

本田宗一郎 は39歳で「人間休業」を宣言  
休業中に自転車用補助エンジン「カブ」のヒントを発見

太平洋戦争下、本田宗一郎は自ら設立した東海精機でピストンリングを製造していたが、浜松大地震により工場は崩壊。終戦後、本田は会社を売却し人間休業を宣言した。一年ほどは尺八などを吹いて遊び暮らしていたという。しかし

その間に発見したのが、後の本田技研を世界に知らしめる「カブ」のアイデア。転機はいつも身近に潜んでいるが、見過ごしてしまいがち。それをつかむため、思い切ったリセットの時間を取ることも有効だ。

本田宗一郎 本田技研工業創業者



東京都世田谷区  
小川宏さん(52歳)

習慣  
11

# 「会社のため」から「社会のため」へ

⑦ 順調なキャリアだったが突然の降格。  
価値観を逆転させて社会貢献活動に尽力

40代半ばまで順風満帆のキャリアを歩んでいた小川宏さんが、役員と衝突して降格。プライドが打ち砕かれた。その矢先、マイクロソフトをやめて途上国の子どもに教育機会を提供する活動をしているジョン・ウッド

氏の本を手に取り激しく共感。小川さんにも小さな子どもがいたのだ。「これからは、会社ではなく社会のために働きたいと思いました」。現在はNPO団体の資金調達を担うファンドレイザーとして活躍中だ。